

「戦争と常会　～西条町又組常会の思い出～」

物見　良昭

私たちの平和組常会は、以前には又組常会と称していた。国鉄の線路を挟んで二〇戸ほどだった。どの家庭にも子どもが何人かはいて賑やかであった。私の家は母子二人で父は出征していた。

さて、その頃の常会はどんなものであったか、記憶をたどってまとめてみたい。

西条町には、江戸の火消しのようにイ組・ロ組という一般に隣組という組織があった。その活動は次のようである。

- ① 町当局からの指示と情報伝達
- ② 冠婚葬祭や日常生活の助け合い
- ③ 防火救助活動
- ④ 勤労奉仕への参加
- ① について

現在も役割を果たしている回覧板は、一般家庭に電話の無かった当時、実に有効な情報伝達の手段であった。どの家にも郵便受けはなく、玄関の戸をガラツと開けて「こんにちは」と大声で言って手渡したものであった。

- ② について

戦争中には、若い男性が戦地に赴くため、地域や家庭に貴重な労働力が不足してくる。特に、田植え、稲刈り等の農作業は困る。そこで、近所の老若男女

が総動員となる。六歳頃の私も水田に入って苗の束を運んだりしたものである。

一方、楽しい行事もあった。それは、年末に行う餅つきである。常会長の家に集まって盛大にやった。お陰でどの家も正月のお雑煮にありつけた。

それから、特に印象深かったのが葬儀である。式は各家の座敷で行ったが、全体を取り仕切るのが常会長で、司会までやっていた。必要な道具は、常会長の倉庫に入っていた。死者は座った状態で納棺したが、それを火葬場まで運ぶのが大変である。「御建の馬場」近くの火葬場まで時代劇で見る「かご」に載せ担いでいくのである。その「かご」は、貧相なもので、いつもは馬場近くの観音堂に収めてあった。

忘れられないのは火葬である。常会の人々が徹夜でマキを燃やすのである。母と二人暮しの私は、いつも母と一緒にあったが、当番の際に火を管理していた母が「その穴から中で焼けとるのがみえるよ」と言った。目の前の壁に小さい穴があって明かりが漏れていた。私は恐ろしくて、のぞくことができなかったが、「自分は男なのに……」と、悔しかった。

③ について

全国の主要な都市が B 29 の空襲により、次々と焼かれていく中で、西条町も家庭防衛隊を組織するとともに、町内の何ヶ所かに消化ポンプを配備したが、私たちの又組常会にも一台きた。常会員が集まり、ポンプを取り囲んで、まるで宇宙船でも見るようにワイワイやっていた。そのポンプは、両側から人が手で上下させる手押し式であった。

実際に使う場面はなかったようだが、日頃は黒橋近くのポンプ車に担架とともに収めてあった。ポンプ庫は、今は見ることは無くなったが、西条西本町の佐竹田畳店近くの本通り筋に残っているのがそれである。

手押しポンプの現物は、西条町郷田公民館に一台残っている。

さて全国的に国防婦人会が組織されたが、母が残したアルバムに訓練の際の記念写真があり、「第一小隊」と記されている。戦争末期に御建神社の馬場で実施された防火と竹槍の訓練の際のものであろう。

母が、「敵兵が落下傘（らっかさ）で降りたところを取り囲んで」と言っていたが、どうもピンとこなかった。

次に、常会として実際に関わった大事件について記しておきたい。

それは、昭和二十年八月六日のことである。母富子の手記をそのまま引用する。

「…、私の家を B 29 が音を立てて行き過ぎ、まもなく家の窓がピカッと光りました。そして空にきこ雲が立ち昇り、私たち、家に居る者五、六名は駅に走って行きました。午後一時過ぎ、家庭防衛隊が担架を持って西条駅に集まるよう報せがありました。汽車から降りてくる人々を医者之家に連れて行く役でした」

子どもの私も、母を追って西条駅に行き、担架が次々と駅の東側にあった料亭「望月」に運び込まれるのを見て、その庭に潜り込んだ。そこで見た光景は、今でも思い出したくない悲惨なものであった。

母の手記を続ける。

「その日の夕方、常会内で行倒れの老人を見つけ、何人かが担架を使って医院まで運びましたが断られ、私の家に泊めました。朝、起きてみると頭髮がたくさん抜け枕に引っ付いていました。言葉をかけても何も言われないので、国立療養所まで担架で運びました」

私の家に泊めたのは、家族が少なかったからだが、私自身は気味が悪いばかりだった。

④ について

私が、母に連れられて勤労奉仕に行ったのは、八本松原村の水田改良工事で、それだけ覚えている。水田に溝を掘り、木の枝を埋めていた。

次に、縄ない作業であるが、岡町の加藤店の隣に何台かの足踏み式縄ない機があった。稲わらを数本ずつ交互に入れて縄を作っていた。これは写真に残っている。

以上が記憶に残っている常会の様子だが、当時、子どもであった私の目に焼き付いているのは、いつも男そのけで動き廻っていたもんぺ姿の女性のある。年齢はそれぞれ違えど一体となって、温厚な常会長のもとであらゆる活動をこなして、「大和なでしこ」の姿である。

現在、平和組常会と名称は変わったが、いつまでもお互いの幸福を願って、日々支え合って生きてゆきたいものである。

【平成二十二年十月】